

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：34104

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K23210

研究課題名（和文）三重県における高齢漁師たちの生きる論理に関する人類学的看護研究

研究課題名（英文）Anthropological Nursing Research on the Logic of Life of Elderly Fishermen in Mie Prefecture

研究代表者

松崎 かさね (Matsuzaki, Kasane)

鈴鹿医療科学大学・看護学部・助教

研究者番号：20881684

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は近年急激に魚（特に底ものと呼ばれる魚介類）が獲れなくなっている伊勢湾で長年漁をする高齢漁師らにインタビューを行い、彼らのライフヒストリーを描くとともに伊勢湾の衰退をめぐる漁師の認識をヨナスの責任の原理を参照しつつ記述したものである。漁師たちはこの現状を「自然の摂理」などとして了解しており、それは漁をする自分と拮抗する関係にある海の魚および他者の守り難さからもたらされるものであることを論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は伊勢湾の衰退という現状をめぐる漁師の認識をヨナスの責任の原理を参照しつつ記述したものである。本研究ではまず、これまでのヨナスの議論においてあまり注目されていなかった点、すなわち「二次的な配慮」としての自然への責任という問題提起を取り出し、漁師として自分が生活することと他者を保護することの両立のし難さの中で立ち上がる認識のあり様を1つの責任の様相として論じた。このことは、いわゆる自然保護をいかにすべきかといった問いとは異なる、いわばもう1つの気遣いのあり方を描いたと言える。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the Ise Bay, where the catch of fish (especially bottom-dwelling species) has been rapidly declining in recent years. Older fishermen were interviewed and their perceptions of the decline of the Ise Bay are described with reference to Jonas's principle of responsibility. The fishermen understood that this current situation as "the order of nature". This study argued that this statement was brought about by the difficulty of protecting others in an antagonistic relationship to themselves as fishermen.

研究分野：文化人類学 老年看護

キーワード：伊勢湾 漁師 責任 ケア

1. 研究開始当初の背景

本研究は、伊勢湾で長年漁をして過ごしている三重県の高齢漁師たちを対象に、彼らの老いとのつき合い方を探求するものであった。それは、事前調査の段階で、彼らが高齢になるに伴って健康問題を抱えるようになって、それが医療・保健の専門職になかなかつながらないという情報を得ていたからであった。本研究は、それを問題としてすぐさま捉えるのではなく、まず彼ら側の生活の論理に寄り添う姿勢を持って理解しようとすることを目指すものであった。

彼らの生きる論理を論じるための伏線として、本研究では品川哲彦が「正義と境を接するもの」として挙げた2つの倫理、すなわち「ケアの倫理」とハンス・ヨナスの「責任という原理」の関係に着目した。それは、これまで種々の看護理論におけるケアの倫理は自らが設ける枠組みの内部にいる人へのみ向けられるのに対し、ヨナスの責任の原理は、その枠組みの外側に対する眼差しを持っている点である。むろん、ケアの議論においてもケアする側の意図を超えたところで成立するような支援のあり方は論じられてきた。けれども、それらを一緒に「ケア」としてしまえば、後者の営みは見えにくくなってしまいうだろう。そこで、本研究はこのヨナスの責任の原理を「もう1つのケアの倫理」と位置づけた上で、三重県での調査を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、伊勢湾で漁をする高齢漁師たちが自らの老いといかに付き合って生きているのか、その論理をハンス・ヨナスの責任の原理を伏線に「もう1つのケアの論理」として論じることであった。

3. 研究の方法

本研究は主に漁港 T を中心としてフィールドワークを行った(調査期間は2020年7月から2023年3月まで)。具体的には、漁業組合の組合長から高齢漁師を数名紹介していただき聞き取りや漁の様子を観察させていただいた他、組合の近くで出会った若い漁師からも漁の様子を見させていただいた。また漁港 T には何度となく足を運び、海の様子や漁の状況の変化を観察した。伊勢湾の生態系の推移やその原因については三重県水産研究所の担当者より話をうかがった。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

はじめに

調査を始めてほどなくして、研究代表者はある事実気づかされた。それは、事前に聞いていた漁師が湾外へ遠洋に出かける人たちであったのに対し、実際に調査が行えた地域は湾内、それもかなり北部に位置する漁港であったため、漁師の気質の違いか、健康問題が起こった際の専門家へのアクセスに関して特に問題はないことであった。その代わり、彼らは別の大きな問題を抱えていた。それはいわゆる底物と呼ばれる小魚やアナゴ、貝、エビなどの漁獲量が明らかな減少傾向にあり、それを主に獲っている漁港 T は近いうちに終わることが予想されていることであった。たとえば、漁師 A は初対面の研究者に対して次のように語った。

もうほんとに、消えてく・・・もう。自然はね、人間がみんな壊していくねんさね。百姓みために、見て育てんのと違って、なあ、世の中そんなふうにかへんもん。 (中略)もう、魚の数も減ったし、昔獲れたもんは獲れんようになったしさな。
全国どこでも、世界中一緒やと思うわ。人間が増えたら環境は変わってくでね。・・・あれが悪いこれが悪いってわしはよう言わへん。ようけ重なってきたに。 [2021/8/5]

ここにあるように、かつてのように魚は獲れなくなっていること、そしてそれは人間側に非があるものとされながらも、そのように割り切ってしまうともしない微妙な了解の仕方がなされていることがわかる。

そのため、本研究は高齢漁師の老いとのつき合い方というテーマから、衰退しつつある伊勢湾とのつき合い方へと問いを変えることとなった。けれどもそれは、当初検討していた議論の伏線である、ヨナスの問題提起をそのまま引き継ぐことでもあったのである。そこで以下では、本研究の事例を考察するのに参照するハンス・ヨナスの『責任という原理 科学技術文明のための倫理学の試み』をとりあげ、彼の責任の原理について改めて議論を行っておきたい。

近年、人間が技術開発を進めるに伴い、人々の営みが自然環境に深刻なダメージを与えようようになってきた。ヨナスが述べる責任とは、そうした状況においてわれわれ人間に課されるものである。ヨナスは責任の原型として、乳飲み子を世話する親の例を挙げる。そこにはこのように書いてある。ヨナスによれば、「親が子に対して責任を負うとは、完全に無私な行動」[ヨナス2000:85]であり、そこにある「他者の存在を思いやり、義務となった配慮で、その存在の傷つく脅威が迫ると「心配」になるような配慮」[ヨナス2000:386]これが責任であるという。

このように読むと、ヨナスの責任とは、親が子を世話するようにして自然環境を保護することだと想像できる。けれども、さらに注意深く読めば、ヨナスの言う責任はそれよりずっと複雑な様相を呈していることが見えてくる。なぜならそれは、「二次的な配慮」[ヨナス 2000: 68]とも言えるものであり、「どちらかと言うと、魅力に乏し」[ヨナス 2000: 385]く、「小心で臆病な人たちの弱さ」[ヨナス 2000: 385]として軽蔑されてきたものだと述べられているからである。

ヨナスは責任の原理を「ユートピアでない原理」[ヨナス 2000: 385]と述べ、希望という原理に対立させる。責任とは、何かかきと成し遂げられるだろうという希望的観測を持って行為（あるいは賭けに出る）することではなく、「滅びゆくものの中に、滅びゆくことなきものを求める」[ヨナス 2000: 156]ことですらないという。つまり、彼の言う責任とは、こちら側が望む形になるよう対象に働きかけるなどといったことではない。むしろ、そのように安易に「対象を「わがもの」とすること」[ヨナス 2000: 156]を禁じたもとのみ達成されるものなのである。そうであればヨナスは、通常私たちが考えるような、自然をいかに保護すべきかという思考とは全く別の角度から、すなわち、もはや自然を守ることが容易でない現実に留まり生きる人間のあり方から立ち上がるものに「責任」という輪郭を与えようとした人なのだとと言える。

ところで、私たちが暮らす現実においては、必ずしもヨナスが前提とするような自然と人間の二項対立図式がきれいに成り立つわけではない。本研究で対象とする漁師は、人間とはいえ、開発を進める行政に反対してきた人たちであった。このように、自然との関係性が異なれば、人の立ち位置はさまざまでありうる。そこで以下では、鳥越らが提唱した「生活環境主義」について触れておきたい。

生活環境主義は、自然生態学的立場である「自然環境主義」と社会の発展を目指して開発を進める「近代技術主義」の間で、そこに生活する人々の視点に立つものである[鳥越 1989: 19]。この視座は、伊勢湾という自然を巡り、企業の誘致や干潟の埋め立てなどが進められていく中で長年漁をして暮らしてきた漁師のポジションを的確に表しているように思える。むしろ先の、現実には自然と人間の二項対立できれいに分類できるわけではないという批判は、当然ここにも当てはまるだろう。けれども、二項の間に第三の項を設けることは、次の意味で意義があると言える。鳥越は言う。「『自然環境主義』と『近代技術主義』というこれらふたつの主義が相互に力をもち、角逐しているのが現状である」[鳥越 1989: 5]と。ここからうかがえるように、この理論は、ともすれば容易にどちらか一方からの視点からのみ整理してしまうその誘惑に抗し、両者の利害が拮抗する現実の困難さを正面からまなざすことを可能とするのである。そしてこれは、先のヨナスの倫理にも通底した姿勢だと言えるだろう。

また本研究では、因果関係に関連した責任の議論もしておきたい。なぜなら本研究は先に論じたヨナスの問題提起を共有しつつも、彼が「未来倫理」と呼ぶような未来志向の人間のあり方ではなく、「なぜ魚が獲れなくなったのか」を巡る、過去 現在の捉え方に焦点があるためである。

國分によると、古代ギリシャの言語には中動態と呼ばれる表現の仕方があったという。これは、「出来事を描写する言語」[國分 2017: 176]であり、「私において～が起こる」といった「主語を座として『自然の勢い』が実現される様を指示する表現」[國分 2017: 187]のことである。國分によれば、この中動態が抑圧されることで現在のわれわれのような能動態と受動態（～する/される）の区別が生まれ、各人の選択には意志が伴うものと理解されるようになり、その人の行為に「責任」が付随するようになったという。

上記の國分の説明は、先の漁師の責任の所在を巡る語りを中動態と能動態に整理するのに有用である一方、両者が共存する複雑さやあいまいさを上手く説明できない。そこで、以下ではさらに竹内による「おのずから」と「みずから」についての議論を参照したい。

能動態と受動態の出現によりはじめて行為者の責任が問われるようになったとする國分の説明に対し、竹内は「おのずから」、つまり中動態の次元に生きることは「すべてが無責任な現状追認を意味するものではない」[竹内 2004: 15]と主張する。彼は、「おのずから」はむしろ、かえっておのれが「正しい原因に生きる事」[竹内 2004:]であるとさえ述べている。

その説明のために挙げた例が能の題目の1つである「姥捨」である。独り捨てられた老女は、悲しみに明け暮れ、そして最後に姥捨て山になった。竹内はこの老女について、彼女は悲しみが癒えたから山に変化したのではない。そうではなくて、悲嘆の底を突き抜けて昇華したのだと説明する[竹内 2004: 226]。彼によれば、「おのずから」は「みずから」を徹底することではじめて行き着く次元なのである。

漁師の語り

本報告書では、漁師たちの中でも先に挙げた漁師 A による、伊勢湾の現状に関する語りをまとめることにしたい。

A (80 歳代、男性) は伊勢湾でも比較的北部の、代々漁師の家の三男として生まれた。他の漁師より体が小さかったという A は、昭和の時代、それまで何人もの人の手で行っていたという底曳き漁の網の巻き取りを電動で行うことに成功し、その省力化の取り組みで表彰されたことがあった。以降、A の所属する漁港 T は、伊勢湾屈指のアナゴが有名な港として栄え、A は漁業組合の役員と四日市市の公害モニターを兼務しながら漁を続けてきた。

アナゴ漁に陰りが見えてきたのは平成 10 年頃であったという。アナゴの数が減り、成長するのに時間がかかるようになり、食べる時に骨が気になるようになった。そのような変化から、A も含め、周りの漁師は誰も息子に漁師を継がせることはしなかったという。かつて地域で最も栄

え、2、300人ほどの漁師が所属していた漁港Tは、調査を始めた2020年時点ですでに残る漁船は2つとなっていた。Aはアナゴ漁を続ける最後の漁師であったが、新型コロナウイルスの拡大から家族に止められたことなども重なり、2021年9月の漁を最後に漁師を辞めた。2023年現在、漁港Tに残る漁船は別の漁師Bの1隻のみとなっている。

Aは、昔の伊勢湾について、次のように話す。

伊勢湾はほんとに魚が多かったんに。昔はな、赤潮っちゅうてな、その水が動くタイミングでアナゴでもなんでもぐーっと押すねんに。でそれを一網打尽に底曳きを受けるんのだ。いっぱい獲れた。そんな獲れ方はあかんのさやなあ？ けども、それはいかにアナゴが多かったかっちゅうことなんさ。[2021/12/14]

昔は時期によって、どこにアナゴがいるかが読みやすかった。戦後は一匹ずつ釣り上げていたが、網で獲るようになってからは大量に獲ることができたという。それは、乱獲にもなりかねない獲り方ではあったが、それを気にする必要はないほどに伊勢湾は豊かであった。

ではなぜアナゴを含め、魚がいなくなったのだろうか。Aは「いろいろあると思うけどな、原因は」と言いつつ、次のことを挙げた。まずは温暖化。水温が上がり、魚が住みにくくなったこと。そして1995年から運用開始となった長良川の河口堰による水流の変化。1980年に漁港Tの属する組合で許可されたという海苔養殖に用いる酸処理剤の影響。中でも、日本4大公害と言われた四日市公害は、公害モニターもしていたAにとって大きなものであった。

四日市がすごく汚水を流しとったで、当時はな、海の色がものすごい変わりよった。赤なったり、青なったり。年々おかしくなるっちゅうことは、目に見えとるのさな。(魚が)痩せたり、成長が止まったりするもんで。「かたわ」の魚もようけおったに。「魚やないやないかい、おんぼ(尾びれ)が2つもあるのなんて」っちゅうて、そういう魚が入りよった。そやで、わしらでも、よう一生懸命になっとったわ。(行政に)「どういことや」って。[2022/1/15]

この語りにあるように、組合の役員でもあったAは、先頭に立って行政にたびたび抗議の声を上げてきた人であった。

だが、その一方で、Aは次のようにも語る。

三重県は絶えず公害の話が出よったもんで、だから青研(年齢の若い漁師の研究会)で議論したりしとると「なんかお前らの話聞いとると、魚に悪いって言うけど、悪いなら悪いって、もっと大きな声で言うてくれたらどや！」なんて言う漁師は、知識がないでさな。[2022/1/15]

公害がいかに魚に有害であるかを知るはずAは、一方であれこれ考えずに何でも「悪い」と声をあげる漁師のことはよく思っていなかった。

何が悪いって、言うたら言うたもんがとことんまで言えばええけど、わからんことを言うねでさな、(魚が)減ったんは事実やけども、ほんとにとことんまでそれ、何が原因かって言えるかって言ったら、ちょっと今の海の状態見とったら、よう言わんやろ？ [2023/3/14]

Aによれば、もはや何が悪いとも言えないのだという。何かが悪いと言え、あれもこれも、「あかんことばっか」になってしまう。

みんな自然に左右されとるでな。これっていう、決定的な、これやっていうようなことは言えへんねん、その当時の人。水の色だって何色に変わったって、なんや変わって当たり前やないか、雨降ったらいつでもそうやわっていうぐらいでさな。その時に、エサができやんとか、酸素がない水があれやってことに、決めつけとったわけやな。その水があかんねやとか。[2023/2/22]

このようにAは、特定の要因を「決めつけ」ることなく、伊勢湾の変容を「自然」の流れのようなものとして受け止めようとしていることがわかる。

Aが上記のような伊勢湾の話から続けて繰り返し話していた話題がある。それは、もうすでにこの世にはいない、自分の娘についての話であった。彼女がまだ4、5歳であった頃のある日、彼女は発熱で体調を崩した。けれども、Aも妻も海苔の漁で多忙な時期であったため、手当が遅くなり、その結果、娘は脳が年々ダメージを受けていく難病を患った。「結局ちょっと、親のミスかなんか知らんけども、忙しかったんで、もうちょっと、それで、手遅れになった」とAは少し言葉を詰まらせながら話した。そしてまた、次のように語る。

自分も障がい児看とったけど・・・悪くはならんけど、ええようにはなあ。魚にええようにはならん、ほんと。自分の生活とつながればなあ。しゃあないことさ。[2023/3/13]

Aにおいて障がいを持った娘の看病と、魚をみることは同一の平面に置かれることのようにであった。それはどちらもA自身の漁師としての生活と切り離すことができないものであるとともに、一方を取ると他方のことはおろそかになってしまう、そのような関係にあったのである。

またAは、伊勢湾で魚が獲れなくなった現状について「何が悪いというわけでもない」と語り、こう続けた。

化学薬品が悪いとか言うてた時に、わたしら話し合ったんさ。で、洗剤とかみんな使うでな。そやで、みんなが(海を)汚してるんやって言って。風呂でも、あれシュシュっかけて、擦って流すだけで、すーっと落ちるわな。やで、誰の責任でもないねん。難しいこと言ってもしゃあない。[2023/5/2]

ここで語られている「誰の責任でもない」は、純粹にそのような意味で言われているわけではない。そうではなくて、工業廃水に含まれる「化学薬品が悪い」という何かに原因を帰属させる考えが、「みんなが汚してる」ことの確認を経て変形したのだとわかる。「みんなが汚してる」ことはさらに、自分たちの生活の質向上と引き換えに起こる「しゃあない」ことだと語られる。つまりそこには、つい直線的な因果関係でとらえてしまうことを各自の生活との兼ね合いを配慮することで回避し、もはや因果では語れない事象として転換・了解するに至るAの志向があったのである。

考察

本研究は、伊勢湾の漁港Tに属する漁師の語りから、魚が獲れなくなっていった現状についての認識を丁寧に見ていった。そこから伺えるのは、Aは魚が獲れない原因についてある程度認識していながらも、その因果関係をうち消す思考を働かせているということであった。それに関連するものとして、手当が遅れたために障害を負ってしまった娘ヨナスは人間の自然への責任の原型がまさに親から子への気遣いだと述べたのだった。その存在があり、それがAにおいて魚との関係にも結びついていることがわかった。すなわち、Aが漁師として生きることは、同時にそれと拮抗する他者の存在の守り難さを負うことでもあったのである。そのようなAの認識は、単に自分のことのみならず伊勢湾の衰退にかかるあらゆる要因を安易に「決めつけ」まいとする方向へ働くとともに、伊勢湾と人間の営みすべてを自然の成り行きとして昇華させていたのであった。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究は伊勢湾の衰退という現状をめぐる漁師の認識をヨナスの責任の原理を参照しつつ記述したものである。本研究ではまず、これまでのヨナスの議論においてあまり注目されていなかった点、すなわち「二次的な配慮」としての自然への責任という問題提起を取り出し、漁師として自分が生活することと他者を保護することの両立のし難さの中で立ち上がる認識のあり様を1つの責任の様相として論じた。このことは、いわゆる自然保護をいかにすべきかといった問いとは異なる、いわばもう一つの気遣いのあり方を描いたと言えるだろう。さらに、戦後以後の四日市公害や海岸の開発などを辿ってきた伊勢湾の歴史を、生態学的な観点からでも、あるいは行政の取り組みの変遷とも異なる、高齢漁師という海と密接にかかわる人の生活の視点から描くことでもあったと言える。

(3)今後の展望

これまでのところ、もう漁師をリタイアした人への調査が主になったが、漁港Tにはあと船が一隻残っており、現役で漁に出る高齢漁師がいる。彼の現在そしてこれからの伊勢湾との付き合い方をさらに探求することで、漁港Tの漁師たちにとっての自然環境との「責任」の様相をさらに厚みのある形で探求できるものと考えられる。

参考文献

鳥越皓之 1989 「経験と生活環境主義」『環境問題の社会理論 生活環境主義の立場から』鳥越皓之編 御茶の水書房。

ヨナス、ハンス 2000 『責任という原理 科学技術文明のための倫理学の試み』加藤尚武監訳 東信堂。

國分功一朗 2017 『中動態の世界 意志と責任の考古学』医学書院。

竹内整一 2004 『「おのずから」と「みずから」 日本思想の基層』春秋社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 松崎かさね
2. 発表標題 「ケアの倫理」再考の試みー介護老人保健施設における入浴ケア拒否の事例からー
3. 学会等名 日本老年看護学会第26回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松崎かさね
2. 発表標題 高齢漁師のプライドに関する一考察ー語りにおける「古い」との距離感覚から
3. 学会等名 日本老年社会科学会 第63回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松崎かさね
2. 発表標題 パチンコ店における「ヌシ」の品格に関する一考察
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松崎かさね
2. 発表標題 東海地方の伊勢湾に面したある漁港の終わり / 同地域の「山の神」信仰
3. 学会等名 中部人類学談話会第260回例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kasane Matsuzaki
2. 発表標題 MEETING NURSING SCIENCE AGAIN: THINKING BETWEEN NURSING AND ANTHROPOLOGY
3. 学会等名 East Asian Forum of Nursing Scholars 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松崎かさね
2. 発表標題 勝ちあいいってわけじゃない パチプロが語る期待値と勝利の美德 (ヴァーチュ)
3. 学会等名 日本文化人類学会・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共催 2020年度次世代育成セミナー・文化/社会人類学研究セミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kasane Matsuzaki
2. 発表標題 Discourse of "Nushi" at Pachinko Parlors
3. 学会等名 AJJ (Anthropology of Japan in Japan) 2020 Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松崎かさね
2. 発表標題 パチンコ店の「ヌシ」に関する言説
3. 学会等名 公益社団法人日本心理学会 奥羽ネガティブ心理学研究会 第5回公開研究集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kasane Matsuzaki
2. 発表標題 Meeting Nursing Science again: Thinking Between Anthropology and Nursing
3. 学会等名 East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松崎かさね
2. 発表標題 「ケアの倫理」再考の試みー介護老人保健施設における入浴ケア拒否の事例からー
3. 学会等名 日本老年看護学会第26回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松崎かさね
2. 発表標題 高齢漁師のプライドに関する一考察ー語りにおける「古い」との距離感覚から
3. 学会等名 日本老年社会科学会 第63回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松崎かさね
2. 発表標題 漁港の終わりー伊勢湾で漁をする高齢漁師たちの語りから
3. 学会等名 日本文化人類学会第57回研究大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

新しい生活様式応援編 鈴鹿漁港&魚魚鈴（鈴鹿市）
CNSテレビ 『きょうはどこまで 北勢散歩』 2020年10月16日

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------